

岩波文庫所収『誹風柳多留』全廿四篇、初の全釈成る!!



東橋画社

◀ 柄井川柳像〔寛政三年版『誹風柳多留』第廿四篇口絵より〕

▼ 鳥居清長画「誹風柳多留シリーズ」より、「相惚れは顔へ格子のあとがつき」（柳多留初篇の句） 天明頃中判錦絵



- 【序】 中野 三敏
- 〔初篇〕 浜田義一郎
- 〔二篇〕 鈴木倉之助
- 〔三篇〕 岩田 秀行
- 〔四篇〕 八木 敬一
- 〔五篇〕 佐藤 要人

江戸文学の黄金期、宝暦〜寛政の間、笑いあり涙あり、当世の人情と風俗を穿った十七文字、寸鉄の滑稽文学「川柳」!!  
 その精粹を選んだ句集『誹風柳多留』全廿四篇、一万六千余句を全釈!! 参考図版多数入り、川柳句解の金字塔!!

江戸川柳研究会編——初篇〜五篇——

第一卷

# 誹風柳多留全廿四篇全釈 一

全四卷

藝華書院

## 中野三敏

通いが始まり、その縁で王子の製紙博物館を根城とした古川柳研究会にも出席するようになった。

(中略)

このたび浅川征一郎さんの発案で、柳多留廿四篇の全積が刊行される運びとなった。既に現代教養文庫の一つとして浜田義一郎先生他による全積が十篇迄は出ていたのだが、今度は初代川柳在世中刊行の二十四篇迄の全句を書き下ろすという。その任に当るのは古川柳研究会のメンバーだ。うだが、紛うことなき快挙といふべきであろう。

(中略)

思えば私なども、身の程しらずも良い所で、学部卒論には「古川柳の文芸性」などと題したものを提出した。

役人の子はにぎくを能く覚

蛤は初手赤貝は夜中なり

などの皮肉句や破礼句に、その頃流行りの実存主義などという借り物の近代文学とは一味も二々味も違った面白味を覚えたから、という事にしておきたいが、その実「末摘花」を一かじりしただけだったのだから、我ながらその厚顔さには、今更ながら恥ずかしい限りである。すぐに山沢英雄先生（三菱嘱託医。岩波文庫版『誹風柳多留』の校訂者）

それにしても、この御老人達の江戸に関する知識の深さには、何時もく舌を巻かずにはおられなかった。何にせよこの方々の御若い頃までは、間違ひなく江戸はそのま、地続きだったに違ひない。鷗外ならずとも「袖ふれ合ったコンタンポラン」という所で、実際そうした実体験とか、生の知識というものの持主でなければ、古川柳という世界は、どうにも歯のたて所は無いのである。それが漸くわかりかけた頃に卒論を提出したので、結果は言わずともしれていよう。到底講壇アカデミズムでは窺い知れぬ深淵の広がりがある、その点は今に続く古川柳研究会のメンバーそれぞれにもあてはまる。しかし次第にこの領域にも老齢化の影がさし初め、恐らくこれが最後のチャンスでもあるろうとは、浅川さんの述懐にもあつた。洵にそうでもあろう。

その意味でも今度の全積は、大いに期待し、大いに御褒めしたい所である。

## 刊行に際して

古川柳の句解は一読了然の句もありますが、言葉や風俗習慣の違い、また古川柳独特の趣向句や謎句仕立ての句もあって一筋縄ではいきません。幸い十篇迄は先人達の研究成果が社会思想社・現代教養文庫版として刊行されていますので、それをそのまま取めました。ただし、その後の研究の進展により、新たに句解の判明したものや、別解を必要とする句も出てきましたので、それらは、古川柳研究会を母体とする当江戸川柳研究会の三名（橋本秀信・鴨下恭明・



あつて川  
あつて川  
あつて川  
あつて川

あつて川  
あつて川  
あつて川



芥川鍋取めかと追つかける

(五篇23番)

\*鍋取II下級の公家、業平。

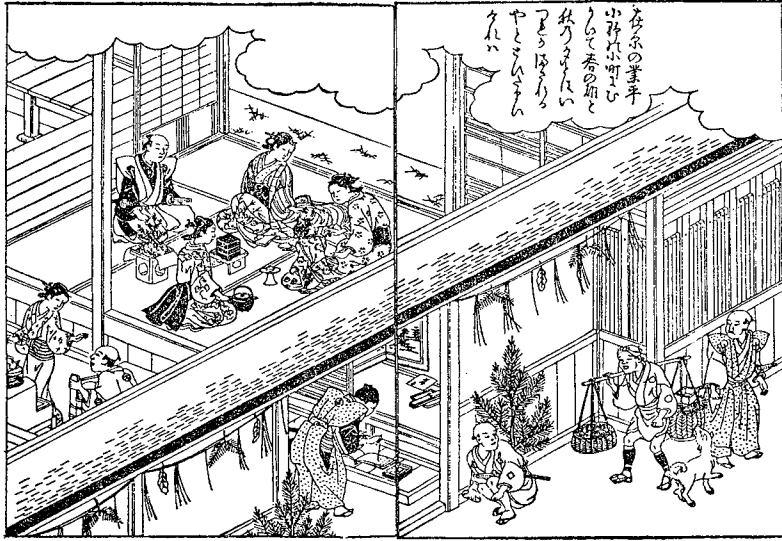
やはくと重みのかゝる芥川

(初篇51番)

—「画本柳柳」三編より

小栗清吾が検討を重ねた結果を（補考）として付しました（三篇のみは岩田秀行氏自身の執筆です）。十篇以降は全て書き下しの新稿です。全廿四篇の執筆者は全員、戦前から連綿と続く古川柳研究会の会員です。今度藝華書院の御英断により、積年の成果をこのようなまとまった形で残世に残すことができますことは、泉下の諸先輩もきつと喜んでいて下さることと思う次第です。

江戸川柳研究会



459 年始帳（『絵本磯馴松』上）

459 年始帳留守を遣ふのはじめ也

すきなことかなく

新年に玄関口に年始帳を出しておき、署名だけさせるのは居留守の使い始めのようだ。出て答礼すべきだのに（上図参照）。

あがるなといわぬばかりの年始帳（柳五386）

460 おのしもといふがいけんのなぐれ也

たまたまなごとく

道楽息子への意見がそれて母親への小言になる。「お前もお前だ」などとばつちり（なぐれ）を食っている。「おのし」は「おぬし」の訛形。

朝帰りだんだん母へ火がまわり（柳二四）

461 ゆかたではいやだと娘ふると出ず

たまたまなごとく

雨降りに女性は浴衣をカッパ代わりにした。それを娘は格好が悪いといって嫌がり、雨が降ると外出しない。「一話一言」十七に「女の雨合羽なし。大きな紋染めたる木綿の浴衣なり（紋は肩と膝にありて素襖の紋の如し多くは蕙の紋なり）」とある。

【第二卷】

- 〈六篇〉 粕谷 宏紀
  - 〈七篇〉 西原 亮
  - 〈八篇〉 室山源三郎
  - 〈九篇〉 八木 敬一
  - 〈十篇〉 佐藤 要人
- 平成27年 3月刊予定

【第三卷】

- 〈十一篇〉 清 博美
  - 〈十二篇〉 橋本 秀信
  - 〈十三篇〉 鴨下 恭明
  - 〈十四篇〉 小栗 清吾
  - 〈十五篇〉 小野 真孝
  - 〈十六篇〉 山田 昭夫
  - 〈十七篇〉 伊吹 和男
- 平成28年 1月刊予定

【第四卷】

- 〈十八篇〉 清 博美
  - 〈十九篇〉 橋本 秀信
  - 〈廿篇〉 鴨下 恭明
  - 〈廿一篇〉 小栗 清吾
  - 〈廿二篇〉 小野 真孝
  - 〈廿三篇〉 山田 昭夫
  - 〈廿四篇〉 岩田 秀行
- 平成28年 11月刊予定

